

学生と日本社会、世界をつなぐ学び： 大学2年生必修科目におけるSDGsを通した学び

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 幸田, 美沙 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4458

学生と日本社会，世界をつなぐ学び —大学2年生必修科目におけるSDGsを通した学び—

児童教育学科 講師 幸田美沙

はじめに

総務省の2019年の調査結果によれば，在留外国人の割合は日本総人口の2パーセントに迫りつつあり，外務省の2019年の調査によれば，在外日本人は139万人を突破し，増加傾向にある。この調査結果から，国際化(internationalism)が今後も進んでいくことは想像に難くない。こうした状況において，コミュニケーションの手段としての英語力は引き続き求められると思われる。英語への興味をいかに育み，維持していくかは，英語科の教員にとって重要な課題である。また，特に小学校教育に携わることを目標とする本学部の学生にとっても，考えていくべき課題であるといえる。

筆者が諸大学において英語科目を担当している教員と実施した調査（2015年度実施，n=682: 有効なデータ 682，欠損値を含む無効なデータ 6，回答率 99.1%）から，大学生の国際問題や世界情勢に関する知的関心は非常に高く，学びたいという意見（36.6%）を持っていることが明らかとなった¹。こうしたニーズは，現在の世界情勢をみると当然のことかもしれない，小学校でも国際問題は積極的に扱われている内容である（山野，2013；渡邊 2019）。

国際問題や世界情勢に関する内容を英語で学習することは，英語への興味関心を育てる上で有効な手段であると思われるが，これには教員も国際問題や世界情勢に関する知識を持つことが必要である。そこで，2019年秋学期に大阪樟蔭女子大学2年生必修科目において，「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, SDGs)」を通じて，世界が抱える課題を知り，身近な問題を取り上げ，解決方法を検討する課題にグループで取り組んでもらった。本稿では，その授業の実践報告と，学生の反応についてまとめる。

1. SDGs とは

2000年9月にニューヨークで開催された国際ミレニアム・サミットにおいて採択された国際ミレニアム宣言を基に，より良い世界を目指す国際社

会の具体的な8つの目標 (Goal) として「ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals, MDGs)」が掲げられた。貧困や男女差別の撤廃、初等教育を全ての子どもが修了できるようにすることなどが目標に含め入れられ、2000年から2015年にわたり、国連加盟国政府や各国の企業が様々な形で協力しMDGsを達成することを目指した。この取り組みは一定の成果をもたらし、数字の上でも様々な変化を引き起こしたが、課題が残る結果となった。そこで、この目標は2015年から2030年に向けた新たな目標、SDGsへと引き継がれた (沖, 2018; 蟹江, 2018; 日能研, 2017)。



図1 SDGs のロゴ (国際連合広報センター (2019))

国連主導で目標設定された MDGs と異なり、SDGs はその目標を定める際に国連事務総長による諮問グループ (ポスト 2015 年開発アジェンダに関するハイレベルパネル) に加え、国連加盟国、国際機関、民間企業、市民社会、研究者など様々な経歴をもつ人間が、オープン・ワーキング・グループ (OMG) という形で議論に参加した。2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ (2030 アジェンダ)」は、「だれ一人取り残さない (No One Left Behind)」ことを基本コンセプトとしており、この具体的な行動目標として SDGs は掲げられた。MDGs は開発途上国の支援

中心であったが、SDGsは先進国における課題も全て対象となっており、全世界の人間の生活に直接関わる目標であることが明確になった。

SDGsには、環境、経済、社会の諸課題が含まれており、それらは密接に結びついている。ある課題に取り組む活動は、その他の課題にも影響するため、課題の関連を深く理解することで複数の課題が同時に解決される場合も起こりうる。また、環境、経済、社会の諸課題は、単一の政府の問題にとどまらず、各国の諸課題とも密接に結びついている。つまり、課題に取り組む何らかの活動を起こす場合、その目標をどのレベルで捉えるかによって、活動方法・活動内容は多岐にわたるといえる。

日本でもMDGsに取り組む企業は多数存在していたが、SDGsに取り組む動きはより活発になっている。例えば、2017年6月にSDGsに関連する取り組みを表彰する「ジャパンSDGsアワード」（外務省、2019b）で表彰された12団体をみると（表1）、取り組みが全国的で、参加団体も大小様々あることがわかる。2019年に実施された第3回アワードでは鹿児島市にある保育園での取り組みがパートナーシップ賞を受賞しており、広い世代の人々が活動に参加可能であるということもわかる。

表1：第1回ジャパンSDGsアワード受賞団体

第1回ジャパンSDGsアワード受賞団体	
本部長賞	北海道下川町
副本部長賞	NPO法人しんせい（福島県郡山市）
	パルシステム生活協同連合会（本部：東京都新宿区）
	金沢工業大学
	サラヤ株式会社（本部：大阪府大阪市）
	住友化学株式会社（本部：東京都中央区）

SDGs パートナー賞 (特別賞)	吉本工業株式会社（本部：大阪府大阪市）
	株式会社伊藤園（本部：東京都渋谷区）
	江東区立八名川小学校
	国立大学法人岡山大学
	公益財団法人ジョイセフ（東京都新宿区）
	福岡県北九州市

2. CLIL の観点からみた SDGs の学習意義

2020 年に小学校 5 年生，6 年生で英語が教科化し，3 年生，4 年生では外国語活動がスタートするにあたり，「内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning, CLIL）」の関心が高まっている。CLIL は言語学習を，その学習内容 (Content) を学ぶ手段と捉えることで，学習内容は学習者にとってより興味あるものとなり，体験的理解の深まりや学習に対する前向きな態度の育成を期待することができるとしている (Marsh, 2000; 山野, 2013)。学習指導要領においても，外国語活動の内容は，「児童が興味・関心をもつ題材を扱い，聞いたり話したりする必然性のある体験的な活動を設定することが大切である」「国語科をはじめとした学校における全ての教育活動と積極的に結び付けることが大切である」（文部科学省，2017）とされ，他教科と連携した，児童にとって興味深い内容で外国語活動をすすめることが求められている。CLIL の観点で英語学習や外国語活動を実施している小学校における実践報告では，SDGs にも含まれている，児童労働や輸出入，飽食 (山野, 2013; 宇土, 2018; 渡邊, 2019) など，一見難しい内容も扱われている。しかしながら，他教科での学習内容を踏まえた上で語彙や背景情報を導入することで，外国語学習がスムーズに進められているようである。このことから，SDGs について知り，自身の生活とどのように関わるのか考えてみることは，大学生にとって有意義であるといえる。

3. 授業での取り組み

2019 年度秋学期に樟蔭女子大学 2 年生（教科教育コース）向けの学科基

礎科目である基礎演習Ⅱにおいて、SDGsに関する学びを通じて、世界にある課題について学習した。教科教育コースに在籍する学生の多くは、将来、小学校で勤務することを希望しており、SDGsについて知ることは、特に意義があると思われる。

SDGsのロゴや関連する活動を目にする機会は多くあり、交通公共機関の中吊り広告や、ラッピング電車（JR 東日本、阪急電車、阪神電車）、スーパーに並ぶ商品にもSDGsのロゴマークが印刷されているものが見受けられる。本学においても、SDGsに関連した取り組みは実施されており、関西SDGsプラットフォーム後援による創立70周年の記念フォーラム（2019年11月17日に実施）が開催されている。また、上記フォーラムにおいて、生協委員（社会的課題班）の学生がSDGsに関連する本学の取り組みについてポスターセッションを行っている。

こうした社会や大学内での取り組みがある一方で、授業内でSDGsのロゴマークを“みたことがある”と答えてくれたのは14名中2名であり、SDGsについて説明できる学生はいなかった。そこで、SDGsの各目標について、調べ学習をするところからスタートした。

初回の授業において、教員がSDGsの成立の背景や目的、日本社会における活動事例など、大まかな説明を実施した。その後4週間に渡り、各目標について、担当者に調べて発表してもらった。この際、日本企業もしくは民間団体における具体的な取り組みを含め入れることとした。

4. 学生の反応

各発表の後には、感想や、分かりにくかったこと、自分の生活においてできる行動などを数名の学生に発表してもらった。互いの発表を通じて、日本における課題や関連する様々な取り組みを知り、「海外における問題であると思っていた」「ほんの小さな努力でも大人数で行えば、大きな効果があると思った」といった気づきの声が聞かれた。

目標15“陸の豊かさを守ろう”に関連して、環境破壊により絶滅の危機にある動物に関する発表の際には、「おじいちゃんと竹の子取りに行った時に、来年の竹の子は残しておくように言われた。将来のビジョンをもって、今の行動を考えるとということと通じると思った」といった意見が聞かれた。地球規模の課題と関連する取り組みを自身の経験、知識に関連付けて捉えな

おすことが出来ると、課題がより身近で考えやすいものとなり、関わり方に様々な可能性があることを指摘してくれた。こうした意見交換を通じて、SDGs が学生の生活にも身近な課題を掲げているということを確認した。

6 週目の授業では、学生の身の回りにある不満、課題について自由に挙げてもらった。「(出身地では夜に空を見上げると星空があるのが当たり前だったので、) 大阪でも星がきれいにみることができたらいいのに」「過労死など働きすぎが深刻」「いじめ問題」「台風被害が深刻である」「戦争をなくしたい」など学生が関心を持ち、解決を願う課題が並んだ。

お互いが出した課題を付箋に記入し、全員で内容を確認した後、SDGs の目標のいずれに関連するか、そして課題解決のためにどういった方法があるのか、自由にアイデアを出してもらった (図 2)。各々の学生は自分が調べて発表したテーマについては他の学生より良く知っているが、この活動を通じて、自分の感じている課題がどの課題と関連するのか、また他の学生の視点を共有することができた。

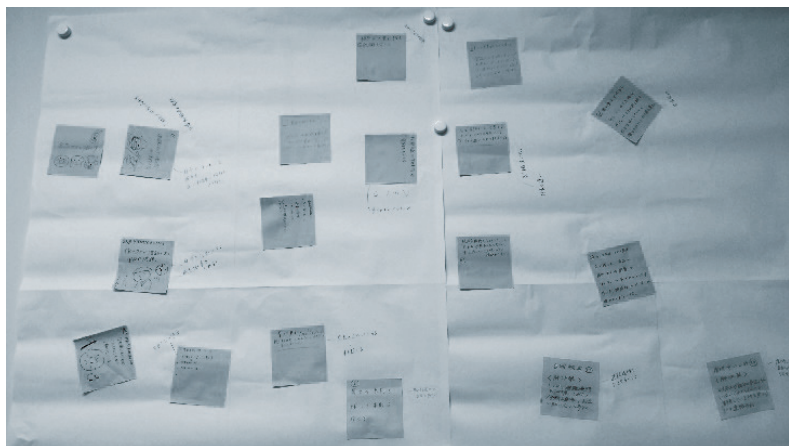


図 2 学生が感じている課題について、他の学生が解決方法の提案を行った

7 週目以降の授業では、1 人から 3 人のグループに分かれ、自分達が身近に感じている課題をひとつ取り上げ、大学生の立場で、どのような関わりが

できるのかをプレゼンするという課題に取り組んだ。例えば、食品ロスをどのように減らすべきかという目標 1 および 2 に関連するテーマでプレゼンをした学生からは、学食における残飯量が気になるという指摘がされ、“学生自身が食べることの出来る量を配膳担当の方に伝え、あらかじめの量を調整すること”で食品ロスを減らすことができるのではないかとという提案がなされた。また、同じテーマに取り組んだ別の発表では、あるコンビニエンスストアで行われている、消費期限間近の商品を購入すると追加ポイントが付与されるというサービスが紹介され、学生にとって利益の大きいサービスが、実は食品ロスを減らす活動であり、積極的に利用することで SDGs の取り組みに寄与することができるという指摘がなされた。

世界が抱える課題を知り、日々の行動の中で、課題解消に向けて寄与することができるという発見は、学生と日本社会、世界を繋げるきっかけになったのではないかな。

おわりに

SDGs が目標達成の期限として設定している 2030 年は、現在大学 2 年生の学生が、30 歳となる年である。社会の一員として様々な課題に直面し、もしくは教員として子ども達とどう暮らしていくべきかを話し合っている頃ではないかと想定された。大学 2 年生の今、SDGs について知り、日々の生活の中で自分の行動を SDGs と関連して考える時間は、自分と世界とのつながりを感じ、意外とその距離が近いことを知る機会となったと思われる。本授業での学びを踏まえて、今後生活をする中で様々な気づきがあることが期待できる。

引用文献

外務省 (2019a) 「海外在留邦人数調査統計 (令和元年版)」, https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html(2019 年 12 月 4 日参照)

外務省 (2019b) 「ジャパン SDGs アワード」,
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/award/index.html> (2019 年 12 月 4 日 参照)

蟹江憲史監修 (2018) 『未来を変える目標 SDGs アイディアブック』, 一般

社団法人 Think the Earth.

Marsh, D (2000) Using languages to learn and leaning to use languages. Finland: University of Jyväskylä.

文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」,
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afildfile/2019/03/18/1387017_011.pdf (2019 年 12 月 5 日参照)

日能研 (2017) 『SDGs (国連 世界の未来を変えるための 17 の目標) 2030 年までのゴール』 みくに出版.

沖大幹, 小野田真二, 黒田かをり他 (2018) 『SDGs の基礎』, 学校法人先端教育機構 事業構想大学院大学出版部.

総務省 (2019) 「住民基本台帳に基づく人口, 人口動態および世帯数 (平成 31 年)」, http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei02_02000177.html (2019 年 12 月 4 日参照)

宇土泰寛 (2018) 「CLIL の視点を活かした小学校外国語教育と社会科の学習 知の融合」『椋山女学園大学教育学部紀要』 pp.135-146.

渡邊聡代他 (2019) 「内容言語統合型学習 (CLIL) による小中高をつなぐ授業 実践—思考を深める発問の工夫—」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』 pp.493-496.

山野有紀 (2013) 「小学校外国語活動における内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と可能性」『「英検」研究助成報告』 pp94-126.

ⁱ この調査結果を踏まえ, 国連が取り組んでいた MDGs を題材とした英語教材開発を行った。調査および教材の詳細は 言語教育エキスポ 2016 にて口頭発表した。